

平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

マチ類

アオダイ *Paracaesio caerulea*

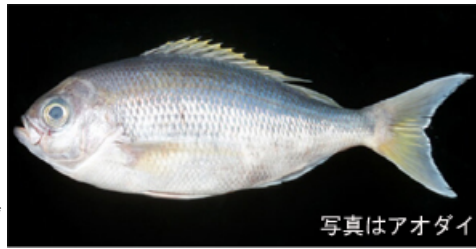
ヒメダイ *Pristipomoides sieboldii*

オオヒメ *Pristipomoides filamentosus*

ハマダイ *Etelis coruscans*

系群名 奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島

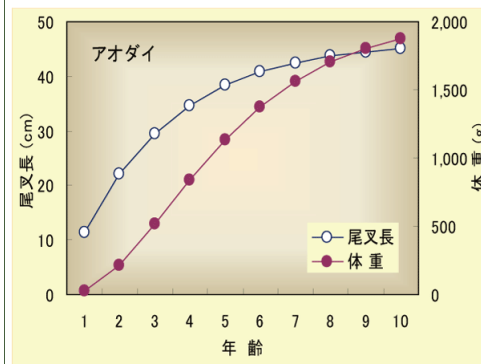
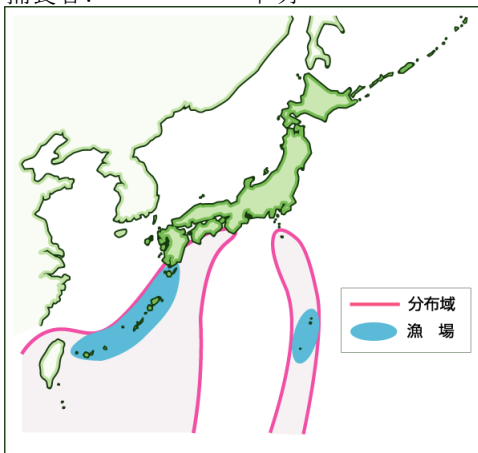
担当水研 西海区水産研究所



写真はアオダイ

生物学的特性

寿命: 不明
 成熟開始年齢: アオダイは3歳(50%), 5歳(100%)、ヒメダイは2歳(50%), 3歳(100%)、オオヒメは3歳(50%), 5歳(100%)、ハマダイは13歳(50%)、20歳以上(100%)
 産卵期・産卵場: アオダイ、ヒメダイ、オオヒメは4～8月、ハマダイは4～11月
 索餌期・索餌場: 不明
 食性: アオダイは大型の動物性プランクトン、ヒメダイとオオヒメは魚類やヒカリボヤなど、ハマダイはイカや魚類
 捕食者: 不明

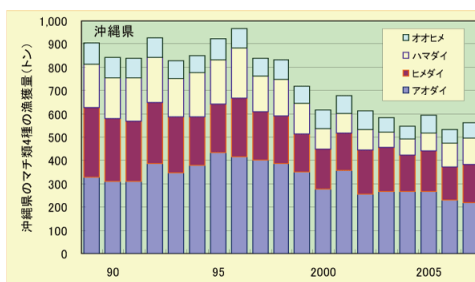
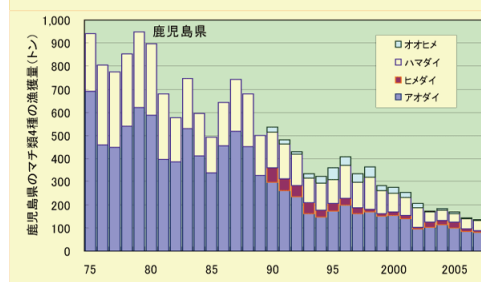
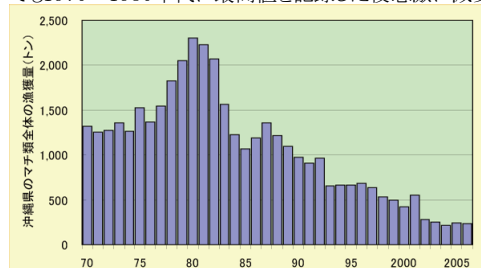


漁業の特徴

水深100m以深の深海底魚一本釣りによる漁獲が多いが、延縄でも漁獲される。周年操業する漁業者が多いが、ソデイカ漁(漁期11～4月)との兼業も行われている。1航海当たりの操業日数は5トン未満の小型船で日帰りまたは2～3日、5トン以上の船で1週間程度。

漁獲の動向

沖縄県におけるマチ類全体の漁獲は、1980年に2,308トンの最高値を記録したが、その後の5年間に急激に減少した。近年5年間ではピーク時の1/10程度の漁獲量であり、主要4種の漁獲の動向は横ばいである。鹿児島県においても1970～1980年代に最高値を記録した後急激に減少し、近年5年間の漁獲の動向は横ばいである。



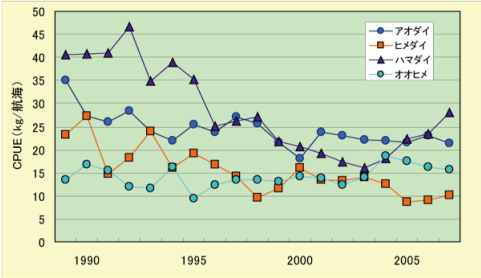
資源評価法

鹿児島県および沖縄県集計の漁獲統計による魚種別漁獲量全体の変動傾向を検討した。また、沖縄県に水揚げされるマチ類のうち、県漁連所属の標本船12隻および八重山漁協所属のマチ類船全体の漁獲量と漁獲努力量の情報を収集し、過去19年間の傾向を検討した。

資源状態

1970～1980年代以降マチ類の漁獲量は急激に減少し、近年5年間では各種ともに横ばい状態が続いている。ただし沖縄県においては、2002年以降一本釣り経営体数も激減していることから、特に近年5年間の漁獲量の減少が必ずしも資源量の減少を表しているとは限らないと考えられる。八重山漁協所属船による過去19年間のCPUEの動向は、4種とも多少の増減を繰り返しながらほぼ横ばい状態を保っていることから、減少傾向に歯止めがかけられたとも見られる。

が、依然として回復の兆しが認められない。4種とも、資源水準は低位であり、動向は横ばいと判断される。



アオダイ	ヒメダイ	オオヒメ	ハマダイ
動向 → 横ばい	動向 → 横ばい	動向 → 横ばい	動向 → 横ばい
水準 高位 中位 低位	水準 高位 中位 低位	水準 高位 中位 低位	水準 高位 中位 低位

管理方策

マチ類主要4種共に資源は低位で動向は横ばいであることから資源回復をはかる必要がある。特にハマダイにおいては親魚量が著しく減少していると推察されることから、早急に親魚の保護と増大に向けた措置が必要である。マチ類は平成15年度に水産庁の進める資源回復計画の対象種に指定され、平成17年4月以降5年間の期限付きで18区の季節的または周年の保護区が設定された。しかしながらハマダイは成熟までに10年以上を要する魚種であることから、保護区を5年で解禁して親魚を漁獲してしまうことは望ましくなく、資源回復計画が終了後も、産卵親魚を保護するための措置が必要と思われる。

資源評価のまとめ

- 沖縄県と鹿児島県におけるマチ類主要4種の資源状態は低水準、動向は横ばい傾向にある
- ハマダイは産卵親魚数が激減している

管理方策のまとめ

- 資源水準の回復のためには漁獲努力量の削減が必要
- 水産庁では2005年4月に資源回復計画を公表済み
- 保護区の設定により産卵親魚が確保され、資源量の増大が期待される

資源評価は毎年更新されます。